

大土由美第3詩集 『移行界』を読む

現実を生き抜くために生み出された世界	秋吉里実	P2
「淀みをフィクションとして書くこと」(『移行界』書評)	荒木時彦	P11
大土由美詩集「移行界」を読んで	岩村美保子	P12
まなざしの大らかさ	真銅 孝	P15
『移行界』散歩	野々ゆか	P17
大土由美詩集『移行界』	若窪 美恵	P20

現実を生き抜くために生み出された世界

大土由美 第3詩集『移行界』について

秋吉里実

はじめに

大土由美さんの詩集『移行界』は、著者3冊目の詩集である。序詩を含め、全32作品が収録されている。

大土さんの詩集を読むのは初めてだったが、言葉が簡潔で無駄がなく、伝えたい内容を正確に表現しようとしている印象を受けた。言葉が割り当てられた場所に的確に置かれ、各々がその役割を全うしている感じだった。文体は柔らかいが、迫力がある。ユーモアもある。一行目から、私は大土さんの世界に引き込まれた。

ここでは、詩集の表題となっている「移行界」という言葉に焦点を絞り、4篇の詩を通して、私が感じたことを書いていきたい。

1 救いと復活の世界

「移行界って何？」おそらく、この詩集を手にした誰もが疑問に思うのではないか。

「移行」なら分かる。そこに、「界」がつく言葉があつただろうか？あとがきによると、「移行界」は、著者の造語だという。表題作の「移行界」を読んでみたい。

お前は四度死んだ

殆ど確信に近い宿り蟲が

耳元で囁く

(「移行界」冒頭)

今までに四度、死んだことがあるらしい。初回は、「生まれ出る時」。

「私は死んで生まれて／復活した」とある。

二度目は

五歳の夏

見知らぬ男がチョコをぶらぶら目の前で

私を攫って行こうとした

ちぎれるほど腕を引っ張るので

腕は肩から外し

するり

パラレル界へ抜け出した

二度あることは三度ある

右折禁止の交差点

直進する愛車シビックに

ぶち当たってきたのはごついデリカ

車は閃光と共に

ワープ

(「移行界」部分)

繰り返しになるが、今までに四度死んだのだ。しかし、その都度復活している。

死に際、「私」は、瞬時に別世界へ移動したようだ。二度目の時はパラレル界へ、三度目はワープしたとある。瞬間移動した先の世界こそが、移行界である。

著者のあとがきによると、「そういえば、今まで死んでいてもおかしくないような時、幸運にもすんでのところで助かったことが何度かある。そんな時、スルリと別世界に移動していたのではないか？」本当は死んだのに、今いるのは別の世界ではないか、という私の根拠のない稚拙な妄想は、時がたつにつれ殆ど確信となっていました」とある。

移行界というのは、今いる場所から瞬時に移動することができる別世界である。

そして、この世界では、復活が可能なのだ。

上記、あとがきの「本当は死んだのに、今いるのは別の世界ではないか」を、視点を変えて考えてみると、自らの気持ちを一新することで、以前とはまるで世界が違って見えることがある。この感覚を、「別世界」と捉えることもできるだろう。

身体的な状況だけでなく、死に値するほどの精神的苦痛の際にも、移行界への移動によって生き返ることが可能だと考える。移行界は、救いと復活の世界といえるだろう。

2 移行界の原点

著者はいつ、移行界という世界を持つようになったのだろうか。

「忘却石」という詩に手がかりがあるように思う。詩を紹介したい。

「私」は、小学校最後の夏休みに、母親の生まれ故郷である耶馬渓の山中で、罠にかかった河童を助けた。河童は泣きながら喜んで、碧の半透明に光る石を「私」に差し出す。河童によると、この石はボウキャクセキといい、「どうしょもなくかなしくてつらいとき／これをなめると／つらいことをわすれることができます～い」とのこと。愛らしいキャラクターである。

小学生の「私」は、もらったばかりの忘却石を頬張る。

ウズラの卵ほどの石を頬張ると

確かに甘酸っぱい

心が軽くなったような気もした

(中略)

幾十年もたったある年

愛するものを続けて亡くした

あまりの苦しさに忘却石を探した

もうそれはどこにもなかった

今ではもう

忘れたいことすら

忘れたことすら

忘れてしまった

だが時おり

忘却石の放つ青い光が

ヘソの穴から漏れ出ていることがある

(「忘却石」部分～最終)

河童は、忘却石を舐めることで辛いことが忘れられると言ったが、辛い体験そのものを忘れるということではなく、辛さを和らげてくれるという意味だと思う。

なぜなら、辛い体験そのものを忘れさせてくれるとすれば、愛する者を亡くした時、その人の存在すべてを忘れ去る必要があるからだ。従って、私は忘却石が持つ力を、苦痛や悲しみを和らげ、癒やしてくれるものとして解釈した。

さて、小学生の時、河童からもらった忘却石を頬張り、舐めたということは、この瞬間、「私」の体内に忘却石が入ってしまったということだ。

この日から何十年も時が経ち、「私」は愛する人を続けて亡くす。

「あまりの苦しさに忘却石を探した／もうそれはどこにもなかった」とあるが、当然である。なぜなら、忘却石は、「私」の中に在るのだから。

この、体内に入り込んでしまった石こそが、移行界の始まりではないかと思う。

忘却石は、移行界の種子のようなものではないだろうか。

小学生だった「私」も、やがて大人になっていく。成長するにつれ、喜びや悲しみ、苦しみなど様々な経験を重ねていく。「私」の心の成長と共に、移行界も広がり、大きく育つていったのではないかと思う。

著者は、移行界について、「自身の感覚世界といったようなもの」と、あとがきで書いている。「パラレルワールドなのではと思われるかも知れないが、異なるもので、自分の内的な世界が具現化したような清新で崇高な世界なのだ」とある。

移行界は、著者の中に存在する。小学生の時、河童からもらった忘却石を頬張った瞬間、彼女の中に移行界という独自の世界が生まれたのだ。

ここを原点に、移行界が始まったといえるだろう。

3 生と死の境界がない世界

「魔法」という詩は、私の好きな詩の一つである。ほのぼのとした気持ちで読んでいたのだが、繰り返し読むうちに、いや待てよ、と思った。

これは、死者との交流の詩だ。詩を読んでみたい。

いとこのとおるさんは大学生でした

幼い私とよく遊んでくれました

(中略)

トランプや紐の手品は不思議

種をあかそうと何度もせがみましたが分かりません

ふわほわ春に包まれたその日

とおるさんがバイオリンを持ってやって来ました

演奏会で弾くという曲を聴かせてくれました

庭のイチジクのように甘い夢のメロディ

ふと気づくと縁側で弾いているとおるさんの周り
三頭の紋白蝶が舞っていました
蝶たちは曲に合わせ踊ります
耳を澄ますと
歌まで唄っています
これはもう手品ではありません
本物の魔法です

あの日から一度も
とおるさんを見かけません
外国に行ったと母さんは言いましたが
どこの国かは教えてはくれませんでした

魔法使いのとおるさん
それとも
とおるさんが魔法

な

の (「魔法」部分～最終)

おそらく、とおるさんは死んでしまったのだ。「ふわほわ春に包まれたその日」に。
とおるさんがバイオリンを持って、「私」の所にやって来たとあるが、まさにこの瞬間、
どこか遠い所でとおるさんは亡くなつたのだろう。演奏会に向かう途中で事故に遭つたの
かもしれない。

第1章で述べたように、「私」の「感覚世界」である移行界に、とおるさんが瞬間移動し、やって来たのである。「私」は移行界で、とおるさんに曲を聴かせてもらっているのだ。

ふと気づくと、とおるさんの周りで、三頭の紋白蝶が曲に合わせて踊り、歌まで唄っているという。「これはもう手品ではありません」と書いているように、この世界では、「本物の魔法」が起きるのである。

私が考えるところ、移行界では生と死の境界が消え、ひと続きになるのだと思う。生者と死者の区別がなくなり、現実の世界では考えられないようなことも、可能になる世界なのだ。

4 夢も移行界につながっている

生と死の境界がなくなる場所といえば、私たちが夜見る夢もそうだといえる。

夢の中では、生者も死者も、会わなくなった友人も、歴史上の人物や有名人も、見知らぬ人までもが、無秩序に出てくる。

第3章から考えると、夢もまた、移行界につながっていると思われる。

ここでは、「私の夢」という詩を読んでみたい。

担任の山下先生が「私の夢」と黒板に書いた

一枚の原稿用紙が配られる

それが卒業文集用の将来の夢だと分かってはいた

でも

私は今朝方見た不思議な夢を一気に書いた (「私の夢」冒頭)

頭部は鳥で、首から下が人間の体をした、鳥人間の夢を原稿用紙に書いていく。

赤く果てしない砂漠で、ヤリを持った四人の鳥人間たちに追いかけられる夢。

もうダメだ、捕まると思った瞬間、彼らはフッと消え、また数百メートル後ろから追いか

けられる。それも、繰り返し、繰り返しだという。

極彩色の恐ろしい今日の夢を書き終え

解放される私

曖昧で不確かな将来の夢より

輪郭の鮮明なこの日の夢の方がよほど頼りになる

だから未だに

私は毎夜

夢を見に出掛ける

おかげでこちらに踏み留まっていられる

(「私の夢」部分～最終)

著者は、あとがきで次のように書いている。

「私はいつも夢に助けられた。悪夢は目覚めたときに、生きていて良かった、この現実世界に戻れて良かった、と、思えるし、美しい夢や幸福な夢は脳内の夢の記憶箱にとっておくと絵や詩をかくときの役にも立つ。また、他者の生死を受け入れるにあたっても、夢が手助けをしてくれる」。

上記の「いつも夢に助けられた」というのは、第1章で述べた通り、救いに通じる。また、詩の中の、「曖昧で不確かな将来の夢より／輪郭の鮮明なこの日の夢の方がよほど頼りになる」という部分では、著者が夢を信頼していることが分かる。

詩の末尾に、「おかげでこちらに踏み留まっていられる」とあるが、こちらとは、現実世界を指すだろう。つまり、生の世界である。私は、第3章で、移行界では生と死の境界がなくなり、ひと続きになるとえた。この世界では、生者と死者の区別がなくなると。しかし、移行界と現実世界の両方を持つ生者（著者）にとってみれば、移行界は瞬間移動

するための一時的な場であると同時に、救いと復活の場でもある。従って、移行界へ移動したあと、再び現実の世界に戻ることが出来なければ、言い換えれば、「こちらに踏み留ま」ことが出来なければ、即、死者となるだろう。

おわりに

移行界とはどのような世界なのか、4篇の詩を通して、これまで私の考えを述べてきた。移行界とは、今いる場所から瞬時に移動することができる別世界であり、苦しみや痛みを和らげてくれる場所である。また、著者を救い、復活する力を与えてくれる場もある。

小学生の時、移行界の原点となる内的世界を生み出してから、移行界は常に著者に寄り添い続けたのだろう。このような世界を持つことは、生きる上で大きな支えとなつたにちがいない。

移行界はこの先、著者と共に、より成熟へ向かっていくことだろう。

「淀みをフィクションとして書くこと」 (『移行界』書評)

荒木時彦

第一章は、作者の子供の頃、学生時代、親族や知人の話を書きながら、それらが、現実の作者自身と間違いなく繋がっていると感じさせる詩が並んでいる。ノスタルジーと、目の前にある現実を見る視点が交錯しており、夢を起点として、過去の出来事や記憶が想起される。夢は自分が見ているにも関わらずコントロールできるものではないという点で、完全に自分の外部にあるものだ。この外部性を伴っているところが、この章のポイントだろう。

第一章の最後の詩「雨の動物園」では、おそらく作者の実体験、及びその土地の出来事が散文で書かれる。小さい頃、訪れた動物園に関する記述があり、おそらく、作者の原風景の一つになっているのだろう。他の詩と読み比べてみても、常に詩は作者の実体験とその土地に結びついている。その意味で、この詩集は、非常に現実的かつ土着的だと言える。長い時間が経った後、それらを書くというのは難しいことだと思うが、その長い時間が経った後だからこそ、出てくる詩があるのだろう。

第二章では、死について具体的に、あるいは暗喩的に書かれた詩が含まれる。死に向かって生があるのだということ自体が、「やりきれないピクニックを精一杯楽しもう」という第二章の題を表しているように思える。現実には常に淀みがあり、それ自体をそのまま表すことは不可能だ。この章では、その淀みを裏側に潜ませながら、表現としての詩が書かれている。

本詩集では、夢と過去を絡めた詩編から、生から死へむかうものとしての人間を描く詩編まで、ノスタルジーを含む作者の記憶が描かれている。そこには、作者自身の体験と思われる箇所もあり、その体験も含め、フィクションとしての詩集が作られていると感じた。

大土由美詩集「移行界」を読んで

岩村美保子

詩集【移行界】は、序詩「元旦」、第一章「私は毎夜夢を見に出掛ける」と、第二章「やりきれないピクニックを精一杯楽しもう」とで成り立っている。出かける先は夢であり、ピクニックはやりきれないという。心弾むだろうピクニックがやりきれないとは、なんとも心惹かれる。

作者とは十歳ほど年が違うようだ。多様な現代とは違い、昭和生まれにとって、みな多くのものを共有していた時代だ。流行りの歌、流行りの服、流行り言葉、思い出話をするときにも、あーそうだったね、と相槌をうつことが多い。それはよく考えてみるとこわいことでもある。手をつなぐ楽しさにうかれたまま、みな同じ方を向いて大きな何かに連れていかれる時代だったのだ、と詩集【移行界】を読みながら改めて時代を振り返ることになった。もちろん、十歳離れていること、育った場所が違うことから、私にとっては初めて知る作者独自の世界もそこには広がっていた。

「それが卒業文集用の将来の夢だと分かってはいた/でも/私は今朝方見た不思議な夢を一気に書いた」「曖昧で不確かな将来の夢より/輪郭の鮮明なこの日の夢の方がよほど頼りになる」『私の夢』。美術の先生だった作者は子供の頃から創造の人だったのだ、輪郭がとても大事なのだ。夢の中は彩色豊かで生き生きとしている。「頭部は鳥で緑の目には白いふちどり/顔と長い首はあざやかな青/尖った大きなくちばしはオレンジ色で/頭には黒と赤の冠のような羽』『私の夢』。総天然色の夢、読んだ先生も楽しんだに違いない。

【移行界】では「死」も重要なテーマだ。身近な人の死のみでなく、大きな戦争のつめあとが、決して思い出のなかではなく、生々しく「今」も息を潜めている。「そのB29の下腹には焼ける街の赤い炎が映って/まるで巨大な艶のいい明太子のようやつた/「明太子を食べる度、いつも思い出すんや」と/お爺さんになった三郎さんが話してくれた」『三郎とB29』。出来事から離れていくほど痛みや悲しみの感覚は少しづつや

わらいでいくのだろうか。それとも鮮明になってゆくのだろうか。明太子を食べる度に思い出す人を想ってちょっとつらくなる。どうか悲しい思い出は薄れていきますようにと願う。

【キナコの星】。ノストラダムスやシンナー、キャンプファイヤー、懐かしい言葉が目をひく。昭和の時代は今よりもっと危険だらけだった。生活のすぐそばにいつもあった。子供のそばにもあった（ある意味それは自然体だったともいえるが）。池で溺れた子を間近に見た自分の記憶もよみがえった。しかし、思い切りのいい作者の表現は、切ない時代の出来事も必ずや通る道だった、そこに確かに生きたのだと言わんばかりの強さを見てくれる。

「巨大なキャンプファイヤー」「太い火柱がうねりながら異次元に吸い込まれていく」「真っ二つに割られた半月」言葉の生命力がこちらに向かってくる。

作者にとって「死」は悲しみではないのだ。生きる力なのだ。

死を意識しながら生きているひとがどれぐらいいるのかわからないが、一つ間違えば死に至っていたという体験や、家族や自分に病気を抱えるとき、人は死を意識することが多いのかもしれない。大土由美詩集「移行界」は、生と死の詩だ。

「私は毎夜/夢を見に出掛ける/おかげでこちらに踏み留まっていられる」【私の夢】。だから踏み留まるのだ、踏み留まれ、と、読者へのエールのようにも思える。

それにしても、チャウチャウには笑ってしまった。民主主義、国と国との重すぎるテーマのなか、ここで登場するのがあの大きくてのんきそうで愛らしい犬？！。「さよなら昭和/さよならデモクラシー/チャウチャウが/手を振っている」『最後の職員会』
さようなら～と手を振るチャウチャウのような大らかな人がそこにいる。

最後に、詩集【移行界】で一番好きな詩について書こう。『ピクニック』だ。はじめにも書いたが、やりきれないピクニックに心をつかまれ続けている。

「段ボールの人力飛行船に乗って」「連なる峰の/赤い大蛇のような国境線を辿って/北にツンドラ/南に焼けただれた草原を眺め/敵に打ち落とされるのでは/きみが疲れて漕ぐのを止めるのでは/そうヒヤヒヤしながら/やりきれないピクニックを/精一杯楽しもう」

国境、いつから引かれてしまった線は、ときにはどうしようもない生きづらさを生む。それでもピクニックにでかけるのだ。楽しむのだ。「歌は「ポポクリカ」/弁当は「つらねのおにぎり」。つらねは知らなかつたけれどおにぎりおいしそう。ピクニックにはぴったり。わからないのはポポクリカ。どんな歌なの？どこの国の歌？調べたけれどわからない。ポポクリカ、ポポクリカ、ポポクリカが誘うから、きょうもでかけよう、自分にしかできないピクニックに。

まなざしの大らかさ

真銅 孝

大土さんの詩には、現実をまっさらにして軽々と飛躍するイメージがあります。現実から遠く離れて、その現実を観察するまなざしの哀切とユーモアがあります。現実を信用してはいないが、見切りをつけてもいない。現実とは異なる層で、かなしみ、慈しんでいるその愛情の大らかさに惹かれます。そこには、かなしみを詩的イメージに昇華しようとする願いが通底しています。現実は生きづらいものですが、半身はパラレルな世界に生きていられるから、この現実の世界でも、もう半身が生きていられるのでしょうか。

どの詩もすてきですが、とくに「移行界」や「最期の職員会」、「両義性類」などが好きです。

「移行界」という詩では、生と死、此岸と彼岸の境界をなんども行き来してきた人生経験が語られながら、なおそこに大土さん特有の鷹揚さも感じられ、そこが魅力的です。死は幻想、夢のイメージにつながりながら、パラレルな世界として、生の世界と重なりあっています。さらに〈宿り蟲〉の存在が、二重化された生死を俯瞰するメタレベルのまなざしを予感させもします。「移行界」は表題作でもあり、きっと詩人の原体験として、そのルーツにもなっているのだとおもいます。

「最期の職員会」では、昭和の旧弊な価値観が描かれますが、そこに、同調圧力からは無縁の世界が不意にあらわれます。会議の緊張感のなかで唐突に「チャウチャウ」という犬のイメージが浮かんでくるのですが、それは権威を笑う以上に、詩的ユーモアによって、いわば弁証法のように純粹な「軽み」へと止揚されます。あるいは、緊張と緩和の法則というべきでしょうか。心が晴れ晴れとして、読んでいて気持ちのいいものです。

「鳥人間の夢」という詩も好きです。ほかにも、さまざまな動物や恐竜、想像上の生き物が登場するのも、読んでいたのしいです。

たとえば「忘却石」には、河童が登場します。小学生のころ、口に含むとつらいことを忘れられる不思議な石を河童にもらうのですが、時を経て今では、

〈忘れたいことすら／忘れたことすら／忘れてしまった〉といいます。そして、最終連で〈だが時おり／忘却石の放つ青い光が／ヘソの穴から漏れ出ている〉のです。ラストの身体をとおした表現が切なく、しんとして心に残るのですが、ほかに「両義性類」という詩も、最後にあらわれる生理現象が印象的です。

〈両義性類〉は〈「恨」〉を持たないといいます。しかし人は〈「恨」〉を持たずには生きられない。やむなく両義性類は、借り物の〈「恨」〉でやり過ごそうします。このあたり、とても共感したくなるのですが、やはり借り物の〈「恨」〉では無理があり、はげしい身体的苦痛をともないそうなガス抜きの様子が描かれます。そして、いよいよ年を多く重ねた詩人は、そろそろ〈本来の両義性類に戻り／悲しみの流入を調整浄化しつつ／飲み込んでいかないとね〉とひとりごちます。ですが、それもつかのま、ラスト、〈駱駝のチーズのような／苦いゲップが出た〉という詩行で作品は結ばれます。まさに両義的というか、滋味深くひらかれた終わり方です。

ときに「忘却石」のように、青い光がヘソの穴から漏れ出たり、また「両義性類」のように、苦いゲップが出たりと、みずからの意思では、どうすることもできない身体的な自然現象があらわれます。ですが、これら不如意なことも、詩人はその不如意なままに受け入れているようです。

冒頭で、半身はパラレルな世界に生きていられるから、この現実の世界でも、もう半身が生きていられるのだといいました。ですが一方で、半身はこの、思いどおりにならない身体を大らかに受け入れて生きているからこそ、かろうじて詩人は詩人のまま、この場所にとどまっていられるのだともおもいます。

そのようにして大土さんは、自在に彼我の世界を行き来しながらも、生死をこえる予感をいつまでも胸にとどめていられるのでしょうか。これから多くの詩が生まれてくる場所です。

『移行界』 散歩

野々ゆか

表扉は、息子の知郎さんが十歳のころ製作した版画。いじめられた時の作品というのに、怒りも悲しみも超えて、ばっしん、ばっしん、真っすぐに進んで行く。このようにして、詩集『移行界』も開かれてゆく。

「ぎぐりぎいーん」、〈元旦〉に音がするのは、作者が心を澄ませているから。地球の自転は、当たり前のようで、当たり前でない、奇跡。

極彩色の〈夢〉は、一気に描きあげられ、読んでいる側も、描きとどめられた絵を前に、「解放」される。夢診断をして現実の世界に活かそうなんて理屈ではない。覚醒(しているつもり)の時には見えていないものがいっぱいある。文学学校のプレ・スクーリングで一緒したとき、しばらく病んで怖い夢にうなされていたころ、その夢に白い龍が現れて、ああ、これで私は救われると確信した、という話をされていた。大土さんは、心と頭と身体と、それから魂というのだろうか、総動員して生きておられるのだなあと、その世界の深遠さに惹き込まれてしまった。

〈星浴び〉は大好きな作品。「星浴び」がしたくて、その詩の中を何度も通る。「頭のてっぺんから足の指先までぜーんぶ心ったい」、いいなあ、「善二先生」の姿、声まで聞こえる。「そんなキザな台詞が腹の底までずしんと届くのは／善二先生の生んだ木彫りの動物たちが生きているから／動物は嘘をつかない／善二先生も嘘を言わない」、大土さんも嘘を言わない。「オランウータンの瞳」の「善二先生」に連れられて、私も「アフリカには六回行った」気分になる。「アフリカの星は／シャワーのごと降るとぞ」、私はどんどん小さくなつて、空は無限に拡がつて、星が音もなく降つてくる、降つてくる。

〈繰り言〉の声には、死んでしまつて帰つてくることもできず、でもどうにも死にきれない人たちの声が重なつて、いつまでも聞こえてくる。

〈三郎とB29〉は、言うまでもなく戦争の、空襲時の凄まじい光景なのだけれど、「サブちゃん、もういいよねえ～」という「母ちゃん」の言葉が優しくて強い。たとえそのまま二人で死んでしまつたとしても、サブちゃんは、「うん、もう、いいよ！」と言い切れたのだ。「明太子食べる度、いつも思い出すんや」、三郎さんが穏やかともいえる口調で語れるのは、戦時中であつても、どんな状況下であつても、「母ちゃん」に精いっぱい愛さ

れていたからだ。

〈最期の職員会〉は、小気味よくて、そうだ！と一緒に叫んでしまう。「ならば私も／聞こえるほどに高鳴る心臓／拳手！」行け！「レジャーシート代わりの日の丸の方が／命と引き換える日の丸よりいいではありませんか」、よくぞ言った！オモシロイのは、「飼い犬」と言われて、ならば「チャウチャウがいい！」と飛躍発想してしまうところ。怒っていてもユーモアたっぷりに別世界へ翔んで行けるのは、〈台風の宵〉に風呂敷を首に巻いて飛び、大満足した体験を持つ作者ならではの特長。

〈キナコの星〉。信じればきっと星になる。惑星だって、星は星。つらい日常、恐ろしい光景も見てしまったカンちゃんが、星になったキナコを想うことで、優しい気持ちのまま過ごしていきますように、と願う。

〈雨の動物園〉は、懐かしいフィルムに静かな雨が降り続いている。「子育てと仕事」、永遠に繰り返されるかのように感じていた日常が、振り返ると映画の場面場面のように現れてくる。観客もなく、リラックスしている動物の表情。赤と黄色のレインコートを着た「妖精」のような子達。そして作者は、「これから」「美しい思い出を拾う」ために、また「雨の日」に動物園へ行こうとしている。私事になるけれど、いいなあ、私も雨の日に息子と行ってみればよかったなあと、ちょっと後悔。あきおくんが「遊園地の乗り物が苦手」というところも、ついつい息子と重ねて、ふっと笑ってしまう。

さまざまに駆け抜けてきて、〈ピクニック〉には、不意に「きみ」が現れる。「生まれる前からの無二の朋友のように」。そういえば、この世に来るとき誰かと手をつないでいた気がする。さあ行っておいで、神様に言われて歩き出したのだけれど、きみのことは意識しなくなっていた。さあ、これからどうする？再び神様の声がして、きみと「ヒヤヒヤ」、でも「やりきれないピクニックを／精一杯楽しもう」と新たな日々を始める。

〈ハロウィンの村〉、昔この国にはハロウィンの行事なんてなかったのだけれど、意味もわからないのだけれど、「とうにダムの下に沈んだ家々も／この日ばかりは／ランタンのように／あかりが灯る」。この明るさも平和でよいのかもしれない。

〈移行界〉、わっ、よくぞご無事で！そして私は奇跡のように大土さんに出会えたのだ！

〈静かな死〉。誰だって自身の最期を想像する。「いつもの通り／最後の晚餐のラムレーズンアイスを食べ／そのレーズンの欠片を誤嚥し／噎せる間もなく／死に至る」、これって理想的。ならば、私は何を食べながらがいいかなあと、かなり真剣に考える。

〈雨の七夕〉。笛飾りは確かに「クリスマスツリーみたい」になってきている。新暦七月

だし、特に近頃は大雨が多い。大雨で流れてしまっても「大小軽重それぞれの願い事は」空を舞って行く気がする。

〈両義性類〉ってあったっけ？思わず辞書を引いている。なんだ、と笑って、それから、えっ？と考え込む。「恨」を持たない、というときの「持たない」は、持たないようにするという意思や努力なのだろうか、作者の場合は。「恨」だらけの私は、ただそれを顔に出さないようにしているだけ。全く次元が違う。「両義性類」であることの哀しみを想像してみる。（解釈が違っていたらごめんなさい）

〈法隆寺〉。作者はエッセイもたくさん書いておられて、詩においても描写や場面の切り取り方が見事。今どきの中高生の姿がほほえましく現れる。若い世代を見守る瞳は「木彫飛鳥仏」になっている。「エンタシス廻廊の柱」に「頬を押し当てる」前から既に。

〈ピンクムーン〉。ピンクムーンさんは、タワマンの何階に住んでいるんだろう。その部屋へ、きっと窓から帰っていったのですよ。（挿絵の鳥が教えてくれました）

〈守歌〉が「ドット・ドット・ドット」鳴り続けている。思えば、この世に在るもののは全てドットで構成されている。「ドットとドットの間は／スカスカ」、だからこそ、自由に把握できる。

〈天体観測手帳〉片手に、あの星で、きっと友人も思い出を眺めている。齡を重ねてくると、目の前の景色でさえ、昔々、あの人と、この人と、過ごしていた時間を辿って見ていくような気がしてくる。そんなことを、しみじみと感じました。

大土さん、第三詩集『移行界』、ご出版おめでとうございます！

最新詩集の感想を書かせていただけすることになり、とってもうれしかったです。ありがとうございます。

大土由美詩集『移行界』

若窪 美恵

この詩集は二部構成になっている。一部が「私は毎夜夢を見に出かける」で、十四作品とエッセーが一作品。二部が「やりきれないピクニックを精一杯楽しもう」で、十五作品の詩が収められている。

大土詩集では寝ているときに見た夢のことを書いている詩が印象に残った。夢は、内面の反映や、無意識との対話などが象徴的に映し出されるかと思うが、大土詩集では、無意識との対話の働きをしている。意識の奥底にあるものを理解するための手段になると見える。夢分析を通じて、彼女は自己認識を深めている。そして夢が作者の心の平穏を促し、詩表現となっている。

好きな詩というか、心に残った詩のいくつかを紹介したい。それらの詩は、どれも死と隣り合わせの世界を行きつ戻りつしている。

わたしの夢

「卒業文集用の将来の夢」について書くための原稿用紙が一枚配られたが、「でも／私は今朝方見た不思議な夢を一気に書いた」らしい。その不思議な夢は、文集を見て書いたのか……卒業文集というから、小学校か中学校だろう。高校でも書かせるかもしれないが。

まあ、ここでは何歳かということはあまり問題ではない。だが、取っておいた文集を見たのではなく、覚えているのだとしたら、いやに記憶力がいい。

「鳥人間の夢を見」たという作者は、その鳥人間の特徴をかなり克明に書いている。「頭部は鳥で緑の目には白いふちどりが」あって、「尖った大きなくちばしはオレンジ色で／頭には黒と赤の冠のような羽がある」のだそうだ。さらに「首から下は人間の体で」で、「ヤリを持って」私を「追ってくる」のだそうだ。「捕まると／と、思った瞬間」消え、繰り返しました追って来るのだとう。こんなに怖い思いをしてなお、「曖昧で不確かな将来の夢より／輪郭の鮮明なこの日の夢のほうがよほど頼りになる」と言い、「毎夜／夢を見に出掛ける」そうだ。その「おかげでこちらに踏み留まっていられる」という。こち

らにというのは、現実世界にという意味だろう。夢が怖いと現実のほうがマシに思えてくるのか。

繰り言

「社会から捨てられたようなこの村で」と、いきなり強い言葉。詩の言葉にふさわしくない気がするが、吸い寄せられるように読む。「兄さんは農薬をあおって自殺しました」と続く。これまた尋常でない。身震いする。私の父の弟も東京で一人暮らしをしながら自殺したのだという。まだ若かったのに。作者の兄さんは「働きづめ」で、「借金までして大学にやった一人息子が官庁に入つて喜んでいた」という。その自慢の息子が過労死した。何ということ！その後、「義姉さんもホームに入って」希望がなくなったのだろうか。農薬を飲むと「内臓が焼けてただれる」そうで、作者は「そんなことあなた出来ますか」と訴えかける。誰に？読む人に。応えは求めていない。ふつうは出来ないとわかっているから。そんな恐ろしいこと。「それがどうにも悔しくて情けなくて／まだ／泪が出ないです」心の中で慟哭している痛々しさが、ストレートに訴えかけるこの詩で、出ない涙を流している。

引っかかった人生

「上場企業のエリートサラリーマン」は悩みもなかつたが、希望もなかつたらしい。ある日「マンション七階から飛び降り」自殺を図った。が、「一階レストランの布のオーガニングを突き抜け／ゴミ収集場の大量ゴミの上に落下」した。男は「かすり傷一つで済んだ」らしい。その男は「半世紀もの間／自身のモザイクの掛かった人生」を「その運、不運を／考えあぐねている」らしい。男は運がいいのか、悪いのか。男が決めること。死ななくて運が良かったねとも、死ねなくて運が悪かったねとも書かれてはいない。でも、生きよという天の采配が下りたのだろう。

キナコの星

あったよね、ノストラダムスの大予言。世界滅亡。「少年たちがひそかに期待した」その日。休みがちのカンちゃんを訪ねた。ちょっと風邪ぎみのカンちゃん。どういう事情なのか、人それぞれ、家の事情がある。「奥の部屋では複数のふざける声」がしていた。「始業式には学校に来いよ」それだけを言って帰った僕。「その夜／カンちゃんの家が燃えた」「太い火柱がうねりながら異次元に吸い込まれていく／カンちゃんの家が燃えている」「僕は布団の中で／カ

ンちゃん生きてて生きててカンちゃんと念じ」た。「カンちゃんはしななかつた」だが「カンちゃんの兄ちゃんともう一人少年が焼け死んだ」「二人はシンナー吸いながら煙草に火を付け／あっという間に火だるま」になった。柴犬のキナコも死に、カンちゃんは「キナコ、助けてやれんかった」と悔やんでいた。「婆ちゃんが、死んだら燃えながら星になるというたけど／あれかなあ～」というカンちゃん。兄ちゃんのことは言わなかったのか。恐ろしい体験を子どものうちにしなければいけなかったカンちゃんは、これからどうなっていくのだろうか。詩を超えて、小説になっている。

移行界

移行世界ではなく、移行界。タイトルにもなっている。作者の造語。パラレルワールドの存在自体を意味するのだろうか。あっちに行こうかい～と誘われているような軽さもある。でも、内容はそんなに軽くはない。「お前は四度死んだ」で始まる。「初回は／生まれ出る時」早すぎる死だ。だが「私は死んで生まれて／復活した」。二度目は「五歳の夏・・・見知らぬ男が・・・私を攫って行こうとした」が「するり／パラレル界へ抜け出した」。三度目は、交通事故。「ぶち当たってきたのはごついデリカ／車は閃光と共に／ワープ」した。四度目「脳動脈瘤のカテーテル手術」で「暫く心臓は止まった」が、これまた息を吹き替えした。もう、死なないのかもしれない、不死身なのかも、と思われるが「とどめの五度めも必ずあります」と弱気な作者。何度目になるかわからないが、最終的に人は死ぬ。そのことを作者はよく知っているし、いつも考えている。

終焉の樹

「穴持たずが霧の中を／じよびじよび／じよびじよび／歩いて行く」穴持たずとは何だろうか。冬眠せずに歩き回る熊のことだ。冬眠する穴を見付けられなったり、十分に栄養を蓄えられてないから眠れないのだ。私もお腹がすいたら眠れない。「腹がすいたなあ／確か炭焼き爺さんの小屋に／イモ床があったなあ～」と向かってたら、「ドンッ！」と「肩をやられ」「流れていた血が固まりだした頃／雷で裂けた檜の大木」の「根元」に「空洞」があり、穴持たずは「檜の根っこに取り込まれ」ていた。そして思う「こうやって死んでいくのか」と。「死と生の間には明確な境界などないんだなあ」と。これも物語がある。死を考える物語だ。生と死の堺はあってなきが如し。まさにパラレルワー

ルド、移行界なのだ。